

Island Fill

Vol. 17



どうして
「フェニックス」事業と
いうのかな？



30th
ANNIVERSARY

設立30周年を迎えて



平素は大阪湾広域臨
海環境整備センター事
業の運営に格別のご支

援とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

当センターは、本年3月をもちまして設立30周年を迎えることができました。大阪湾圏域から発生する廃棄物を適正に処理し、海面埋立することにより、港湾の秩序ある整備を図りながら、地域の生活環境保全および均衡ある発展に寄与することを目的として昭和57年に設立されました。以来、国、港湾管理者、圏域の地方公共団体、産業界等のご協力を得て、その公共的役割を30年にわたり果たし、近畿2府4県約2,000万人の人々の生活を支えてまいりました。改めて、関係の皆様へ感謝申し上げます。

近年の廃棄物を取り巻く状況は、3R活動等減量化により廃棄物の最終処分量は減少傾向にあるも

大阪湾広域臨海環境整備センター理事長

よしもと ともゆき
吉本 知之

の、内陸部での最終処分場の確保が困難な状況にあること等から、フェニックス事業への最終処分依存度は年々高まっており、当センターの果たすべき役割は今後ますます重要になるものと考えております。

一方、社会、経済情勢の変化に伴い、当センターでは、負担の公平化など諸課題の解消に向けて取り組みを進めています。

こうした状況のなか、より一層の省資源化の推進や資源の再利用の促進を図りながら、事業スキームを改善し、当センターが引き続き圏域の廃棄物の長期的かつ安定的な適正処理に寄与できるよう、関係各位のご協力を得ながら、フェニックス事業の推進に全力で取り組んでまいり所存であります。今後とも、なお一層皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



フェニックス事業は、廃棄物によって埋め立てた土地を緑の大地として再生させる目的があり、よみがえる不死鳥（エジプト神話）と、ヤシ科の観葉植物の「フェニックス」に由来しています。



センター30年のあゆみ

30th Anniversary
Osaka Bay Regional Offshore Environmental Improvement Center

Keep Green
Save The Earth



【昭和】

57年

●大阪湾フェニックスセンター設立

60年

●大阪湾圏域広域処理場基本計画認可
(尼崎沖・泉大津沖埋立処分場)

61年

●尼崎沖埋立処分場工事着工

63年

●泉大津沖埋立処分場工事着工

【平成】

2年

●尼崎沖埋立処分場供用開始
●尼崎基地廃棄物受入開始
●播磨基地廃棄物受入開始

3年

●津名基地廃棄物受入開始

1982

4年

●泉大津沖埋立処分場供用開始
●泉大津基地廃棄物受入開始
●神戸基地廃棄物受入開始
●堺基地廃棄物受入開始

8年

●和歌山基地廃棄物受入開始

9年

●基本計画変更認可(神戸沖埋立処分場)

10年

●神戸沖埋立処分場工事着工

12年

●基本計画変更認可(大阪沖埋立処分場)

13年

●大阪沖埋立処分場工事着工
●基本計画変更認可
(受入対象区域・埋立期間)
●神戸沖埋立処分場供用開始
●姫路基地廃棄物受入開始

14年

●泉大津沖埋立処分場管理型受入終了
●尼崎沖埋立処分場管理型受入終了

18年

●基本計画変更認可
(受入対象区域・埋立期間)

21年

●大阪沖埋立処分場供用開始

22年

●基本計画変更認可
(受入対象区域・廃棄物の種類及び量)

23年

●基本計画変更認可申請
(廃棄物の種類及び量・埋立期間)

~2012
to be continued...

フェニックス事業と埋立処分場の現況

大阪湾広域臨海環境整備センターは、設立30周年を迎えます。設立当時は、高度経済成長以降の大量生産、大量廃棄の時代であり、近畿圏の内陸部では高密度な土地利用が進み、廃棄物の最終処分地の確保が困難な時代背景がありました。また、経済を支えていた港湾における物流拠点の拡充が求められ、湾岸部における土地の需要が大きかったこともあり、フェニックス事業はこのような時代背景も後押しして、環境行政と港湾行政と共に社会的要請を受けてスタートしました。

その後、好景気の中、広域処理対象区域の廃棄物を適正に処理することにより、地域の生活環境を守り、港湾設備の充実を図るため事業を進めてきました。港湾管理者は廃棄物埋立護岸を建設し、埋立してできた土地の利用や売却が可能となり護岸建設費用が回収できるとして、排出者は比較的安価に安定かつ適切に廃棄物を最終処分できていました。

しかし、産業構造の変化、環境意識の高揚、減量化の推進など、社会を取り巻く情勢が大きく変化し、土地需要の減少、管理型処分場利用に関する新たな規制強化による土地利用の制限などにより、土地評価額の減価が見込まれることから、港湾管理者は護岸建設費用の確保が困難になるとともに、このままでは事業継続への影響も懸念されるようになりました。

また産業廃棄物の受入は、計画より前倒しで進捗しており、減量化の進んでいる一般廃棄物の受入枠の一部を産業廃棄物の受入枠に振り替えて受入期間を延伸できるように基本計画の変更をす

ることにより、所要経費が増加することになります。

これら課題の解消を目的とする新たなスキームとして、港湾管理者の過度の負担を軽減するための護岸使用料と受入期間延伸に伴う所要経費の増加に対応するため、処分料金の値上げを実施することといたしました。皆様のご理解とご支援のもと、当センターは、これからもフェニックス事業の長期的かつ安定的な運営を目指してまいります。

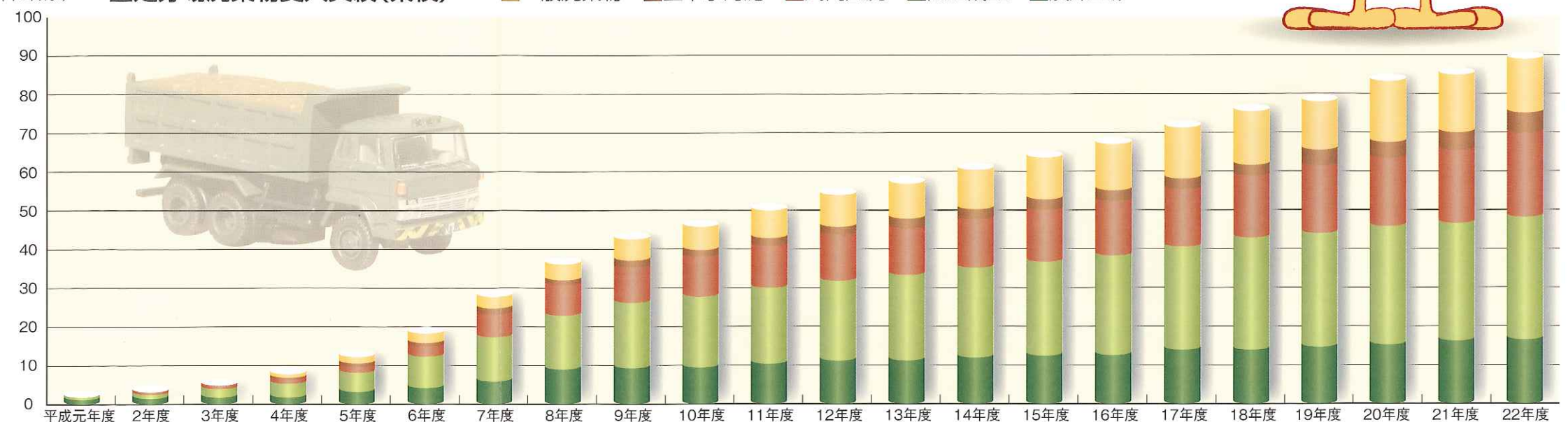
処分場の現況(平成23年3月末現在)

処分場	面積(ha)	計画量(千㎡)	埋立量(千㎡)	進捗率(%)	竣工済面積
尼崎沖	113	15,782	14,885	94.3	27ha
泉大津沖	203	30,800	27,313	88.7	106ha
神戸沖	88	15,000	9,395	62.6	—
大阪沖	95	13,975	938	6.7	—
合計	499	75,557	52,531	69.5	※計画量は廃棄物処理法届出容量

(単位:百万ト)

全処分場廃棄物受入実績(累積)

■一般廃棄物 ■上下水汚泥 ■民間産廃 ■陸上残土 ■浚渫土砂



※受入開始時の受入量は、月平均16万トンの受入を行っていました。比べて平成22年度は月平均約24万トンと1.5倍になっています。



広報誌からみた 埋立処分場の今昔

①の尼崎沖埋立処分場は、平成2年に開業し、既に廃棄物の受入は終了し、現在は覆土のみ搬入しています。開業以降は少し景気の後退もあって、廃棄物の受入量の伸びも緩やかでした。現在一部の土地は緑地として生まれ変わっています。

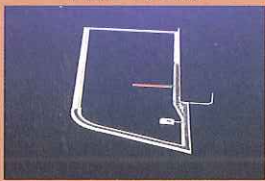
②の泉大津沖埋立処分場は、①の約2倍の規模を持ちます。管理型廃棄物の受入は終了しましたが、引き続き安定型廃棄物を受け入れており、できた土地の一部は、コンサートや中古自動車の

オークションなどの会場として活用されています。

③の神戸沖埋立処分場は、平成13年の供用開始から約10年が経ち、現在6割程度の進捗で、少し陸域が見え始めています。

④の大阪沖埋立処分場は、一番新しい埋立処分場で、進捗はまだ1割程度です。

現在、これら4つの埋立処分場全体としては、約6割の埋立が進んでいる状況です。また、尼崎沖埋立処分場で廃棄物の受入を開始した当時の広域処理対象区域は、近畿2府4県全域の約36%でしたが、現在では大幅に拡大して約63%に広がっています。これは内陸部での最終処分場の確保が、より困難になっているからと言えるでしょう。

	① 尼崎沖	② 泉大津沖	③ 神戸沖	④ 大阪沖
平成2年当時				
当 時 (広報誌切抜)				
現 在 (平成23年8月)				

夏のビッグイベント!! 野外コンサートin泉大津!!

i Land Fill Vol. 4号を振り返りますと、泉大津処分場の一部が、平成16年度に竣功したことより、その広場を利用して、平成17年度からフェニックスコンサートが誕生したようです。当時は3日間の公演があり、延べ約50,000人の観客が熱い声援を送ったと記載されています。

もちろん、今年度も熱かったです。毎年恒例の野外コンサート「RUSH BALL 2011」が9月4日(日)に開催され、前日の近畿に接近した台風12号による影響が心配されましたが、会場となる芝生広場には、約15,000人の観客が来場し、次々に登場する出演者に大きな声援を送り、会場全体が熱気に包まれていました。泉大津フェニックスでの野外コンサートは、夏のビッグイベントとして定着しています。会場特設ブースを設け、多くの方々へフェニックス事業などの紹介を行い、理解を深めていただくことに努めました。

フェニックスコンサートの様子
(平成23年9月)



泉大津沖埋立処分場



好評!! フェニックス講座!!



今年度も、大阪府港湾局、泉大津市役所とタイアップして、当センターの施設「泉大津沖埋立処分場」がある泉大津市内の3つの小学校へ行き、5年生の児童延べ約370人にフェニックス講座を実施しました。

「ごみの行方」について約20分ほどの講座ですが、熱心に耳を傾けて、「うん、うん。」とうなずいている児童や、「そんなこと、もう知っているよ。」とでも言いたげな表情の児童など、いろんな顔が見られました。11月の少し肌寒い時期でありましたが、児童のみなさんはいへん元気で、一部クイズ形式(3択)では、答えを発表するたび大いに盛り上がりました。普段、家庭から出たごみが、収集されたあと焼却工場へ運ばれていることは知っていたかも知れませんが、焼

却されたあとの灰がどこへ行くのか、また、3R活動について、フェニックス講座を聞いた児童のみなさんには、勉強になったと思います。

児童の環境学習の一環と3R活動の推進のため、平成18年度途中から当センターの職員が小学校などに出かけて、フェニックス事業の概要や家庭から出たごみの行方について出前講座をしたのが、フェニックス講座のはじまりです。当時はパソコンによるスライドではなく、広報用ビデオを見ていただいたり、児童用のパンフレットに沿って説明をしていました。スライドの良いところは、児童が下を向くことが少なく、画面を見ながら、職員の説明を聞けるスタイルで、視覚的にも児童の理解を得やすいところだと思います。もちろん、児童用のパンフレットも復習できるように配布しています。



平成18年当時

尼崎の海で ワカメを使った水質改善

大阪湾フェニックスセンターは、「環境管理計画」を策定して、埋立処分場周辺における海域環境の修復・再生を目指しています。尼崎沖埋立処分場においては、尼崎港内の水質を改善するため、直立護岸でワカメを育てる活動を行っています。

徳島大学の上月康則教授の研究室、(社)生態系工学研究会、NPO「人と自然とまちづくり」とが中心となって、地元の尼崎市立成良中学校、兵庫県立小田高校、兵庫県阪南県民局尼崎港管理事務所等の協力を得て、平成22年12月にワカメの種付け、平成23年5月にワカメを収穫しました。ワカメは、港内の水質悪化の原因となっている過剰な栄養塩(窒素・リン)を吸収して成長し、水質を浄化します。また魚などの餌場にもなっています。

収穫したワカメは枯草と混ぜ合わせて堆肥化し、処分場内での菜の花栽培や、成良中学校屋上菜園の堆肥として用いています。

ワカメを育成して海からの栄養塩を取り上げ、堆肥化して有効活用することにより、海と陸をつなぐ栄養塩の循環型社会が実現します。



ワカメを収穫し、笑顔の生徒たち(尼崎沖埋立処分場にて)



ワカメと生徒たち



海的环境を通じて、家庭や企業から出るごみや排水について考える機会にもなることから、今後も、処分場周辺海域の水質や水環境の改善に取り組んでまいります。

物の豊かさから心の豊かさへ



きたの まさる
明治大学 理工学部 教授 **北野 大**

20世紀の人類はエネルギー資源や鉱物資源の枯渇性を初めて認識するとともに、産業活動の拡大により人為的に地球の気候を変動、具体的には温暖化を起こしてしまいました。環境が生物に影響を与えた例は数多くありますが、生物が地球の環境を変化させた例には、約38億年前に藻類が地球上の二酸化炭素を酸素に変換したことがあります。人為起源の地球温暖化はこれにも匹敵するような大事件です。

これらの認識と経験から私たちは循環型社会を目指すことになりました。社会を循環型にすることにより資源の枯渇を防ぎ、また廃棄物を減少させることが可能になるからです。しかし、循環型社会は最終ゴールではないことに気をつけねばなりません。最終ゴールは持続可能な発展の社会であり、そのために社会を循環型にする必要があるわけです。すなわち持続可能な社会を作るための方法、手段の一つが循環型社会です。ちなみに持続可能な発展とは、「現代世代の発展欲求を損なうことのないような形で後世代の発展欲求を満たすような発展」と定義されています。わかりづらい表現ですが、一言でいえば私たち現代だけが発展すればよいということではなく、私たちが発展しつつ次の世代も発展できるような余地を残しておくということです。具体的には持続可能な発展の社会は(1)循環型社会(2)低炭素型社会(3)自然共生型社会の組み合わせから成り立ちます。

循環型社会ですが、当然のことですが生産、流通、使用、リサイクルすればよいという物ではありません。大量生産、大量消費、大量リサイクルではありません。循環させるためには化石燃料というエネルギー資源が投入されています。日本では一次エネルギーの約85%が化石燃料です。これは当然のこと

ですが、地球温暖化をもたらし、さらにはエネルギー資源の枯渇という問題が生じてきます。そこで大切なのが資源エネルギー低投入型の循環型社会です。別の表現をすればスローな循環ということになります。生産、流通、使用、リサイクルの循環のどの部分をスローにすべきか、当然ですが使用のところです。すなわち良いものを長く大切に使うということです。物は長く使うことにより、物自身が持つ経済的価値に加えて思い出や愛情などの心理的価値が付加されてきます。

さて、環境問題ではNIMBYということがよく言われます。これは「Not in My Backyard.」つまり「私の家の裏庭の中はだめ」という意味で、総論賛成、各論反対を言います。英語でNIMBY Syndrome(ニンビー症候)という言葉がありますので、これは日本人特有のことではなく、人類共通のエゴともいえます。総論が正しいか、各論が正しいかではなく、如何に総論と各論を合わせるかが問われています。廃棄物の問題でいえば如何に廃棄物を処理するかでなく、如何に廃棄物の発生を減らすか、がその解といえます。

世代間倫理という言葉があります。私たちは次の世代に責任があるのです。負の遺産を残すことなくよりよい環境を次の世代に残す義務があります。次の世代の人たちの恨みや怒りを買うことのないライフスタイルを考えねばなりません。

私は10年くらい前から「物の豊かさから心の豊かさ」への転換を呼びかけています。昨年の大震災でこの感をさらに強くしました。物を持つことに喜び、生きがいを感じることはかなさず。

心の豊かさとは何か。それは各人がそれぞれ考え、見出だすべきことですが、私自身心の豊かさとは生きがいと思っています。この生きがいとは感動すること、感謝されることです。

新しい価値観をもって環境問題、資源問題に取り組んでいくではありませんか。

編集後記

今回、発行しました「i Land Fill Vol.17」は、設立30周年記念号として作成し、事業展開を年表形式にまとめ、当時の各埋立処分場の様子から現在までの変化を、航空写真で比べてみることにいたしました。

まだ30年しか経っていないとの見方もありますが、その30年を大阪湾圏域の廃棄物の最終処分に努めてきました。しかしながら、減量化推進をはじめ、いろいろな社会状況の変化により埋立の進捗や土地需要など、フェニックス事業の開始当時からみれば、大きく変化してきています。当センターとしては、それら課題を踏まえ、たうえで、長期的に安定運営を確保しながら、これからも圏域住民の方々や関係者の皆様方に貢献できるように取り組んでいきたいと考えております。

ご意見やご感想がございましたら、右記のE-mailアドレスまでお寄せください。

(編集スタッフ一同)

i land fill Vol.17

発行: 大阪湾広域臨海環境整備センター
フェニックスセンター

http://www.osakawan-center.or.jp
〒530-0005
大阪市北区中之島2-2-2 大阪中之島ビル9階

TEL 06-6204-1721(代)
FAX 06-6204-1728

E-mail phoenix@osakawan-center.or.jp
i Land Fill は当センターホームページにも掲載しております。



2012.03